



福島の歴史

新たに判明した シカゴ万国博覧会の姿



福島家資料：博覧会出品補助出願人名簿

近年「明治」への関心が高まっており、当館もこれまで明治期の万国博覧会（以降、万博）に関連した企画展などを実施してきましたが、このほど、新しい万博関連資料の寄贈があり、明治26（1893）年に開催されたシカゴ万博の新たな一面が判明いたしました。資料は、佐賀県内務部より黒牟田の窯焼き・福島幸次郎に送られたシカゴ万博に関する公文書の写し（以降、福島家資料）で、これによって万博出品者の名前や生産地の状況、万博会場への輸送方法などが分かったのです。

そもそもシカゴ万博は、明治26年5月1日～10月3日にかけて、アメリカイリノイ州シカゴで行われた博覧会で、別名コロンブス（漢字表記「閣龍」）世界博覧会ともいわれています。日本政府は、国内産業発展のため積極的に参加を奨励し、出品物の輸送や保管などに対して補助金を交付しましたが、そこに出品に際しての渡航費等は含まれていませんでした。

今回寄贈を受けた福島家資料に「博覧会出品補助出願人名簿」という文書が確認され、これが補助金申請を行った人物名簿であることが分かりました。そこにはシカゴ万博の褒状の存在が確認されている深川栄左衛門や城島栄吉、松尾徳助の名はもちろん、酒井田柿右衛門や、陶山神社磁器製鳥居（国登録有形文化財）の製造人である岩尾久吉など、総勢28人の名が挙がっています。補助金申請のみ行い、出品していないとは考え難いため、この28人が実際の出品者であったと思われま。

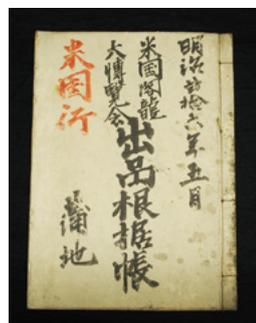
さらに福島家資料にある佐賀県の「明治式拾五年度地方税支出予算追加議案」には、大変面白いことが書かれていました。その内容を要約すると、

佐賀県のシカゴ万博出品物は「（東京府認可）閣龍博覧会中央協会」に一切を委託することにしていたが、近年陶磁器の輸出は低迷し、その理由も定かではない。

今回の万博は千載一遇の機会なので、現地の嗜好・流行・適正価格などを調査し、販路拡大につなげるべきである。そのため佐賀県独自に出品総代人を選出してシカゴに派遣し、輸送販売から調査の一切を任せたいので、総代人のシカゴまでの渡航費4,500円の内3分の1の1,500円を地方税より補助したい。というものでした。

理由は不明ですがこの予算案は可決されず、当初の予定通り「閣龍博覧会中央協会」に全件を委託しています。もしかして「閣龍博覧会中央協会」の総代人として有田の深川忠治が選出されていることから、あえて独自の総代人は不要と考えたのかもしれませんが。そのほか、福島家資料からは、出品物は明治26年2月28日までに「普通日本荷造」で、神戸港栄町5丁目の蒲地倉之助宛に送り、そこで海外発送用の「本荷造」にしたことが分かります。その際、目録と現物が一致するように、誰の出品物で、どの目録の何番であるかを内箱に紙一枚貼り付けるようにすること、といった細かい指示を通知していたことも確認できました。

ところで、実は当館の館蔵資料に、町内の蒲地商店からご寄贈頂いた「閣龍世界博覧会出品根据帳」（写真右）があります。これまでシカゴ万博の出品目録ではないかと考えられていましたが、詳細は不明でした。今回、福島家資料とあわせたことで、これが各出品者より神戸に送られ、そこで海外輸送のために再梱包された輸送目録であったことが判明したのです。



新しい資料の発見によって、シカゴ万博の姿が一層鮮やかになりました。今後研究が進み、万博の解明に繋がることを期待します。（永井 都）

皿 季刊 山

No.128

冬 2020

有田町歴史民俗資料館・館報

企画展「足もとに眠る 有田焼工房跡を探る！」

～泉山一丁目遺跡・中樽一丁目遺跡発掘調査報告展～

会期：令和2年11月14日(土)～12月20日(日)

会期中無休・入館無料

はじめに

有田町歴史民俗資料館東館と併設する有田焼参考館では、11月14日(土)から12月20日(日)の会期で、「足もとに眠る 有田焼工房を探る！」と題した企画展を開催中です。これは県道泉山大谷線街路整備事業による、泉山・中樽の両地区を結ぶ道路の新設に伴い、平成25～27年度に実施した発掘調査の成果を公開するもので、江戸時代から近代に至る数々の遺構が発見されています。



泉山一丁目遺跡・中樽一丁目遺跡全景

遺跡の概要

この遺跡の周辺は、安政6（1859）年の『松浦郡有田郷図』（佐賀県立図書館蔵）では、多くの家屋が建ち並ぶ住宅街となっており、遺跡の有無を調べる事前の確認調査では、遺構と推測される構造物や多くの遺物が出土しました。そのため、それぞれ立地する地区別に、泉山一丁目遺跡、中樽一丁目遺跡と命名し、県道に接続する町道部分を含めて、4回に分けて正式な発掘調査を実施しています。

調査では、『松浦郡有田郷図』に描かれるとおりに、宅地が全域に広がっていましたが、中樽一丁目遺跡の部分は1640年代から継続的に利用されていたものの、泉山一丁目遺跡の部分は、有田の内山全域を焼き尽くした文政11（1828）年の大火以降、安政6年の絵図以前に宅地化されたことが判明しました。

この遺跡では、製土から登り窯による本焼き工程までを担った、有田では“窯焼き”と称される製陶業者の住居兼工房跡が複数発見されています。これは、こ

れまで佐賀県重要文化財「染付有田皿山職人尽し絵図大皿（以下、「絵図大皿」）」（有田陶磁美術館蔵）などの絵画資料や、わずかな文献史料でしか知り得なかった製陶工房の状況を現代に伝える画期的な発見で、絵画や文字史料にありがちな虚偽や虚飾のない生のやきもの製作の現場の姿をよみがえらせるものでした。

歴史民俗資料館の展示



展示室正面の展示風景

今回の展示では、この“窯焼き”の工房に焦点を当て、まず、歴史民俗資料館東館の展示室では、製土から焼成に至るまでの各製作工程の遺構写真や遺物・民俗資料を、「絵図大皿」に描かれた各工程と比較しつつ、有田焼の製作工程に関する理解を深められるようにしました。また、「絵図大皿」と平成28年に有田焼創業



展示中の発掘調査用具

400年記念事業の一環として製作された2枚の「平成の職人尽し絵図大皿」（伝統工芸／機械化・オートメーション化）の対比によって、江戸時代と現代の工程の違いなども明らかにしています。さらに、釉薬用陶石の粉碎に用いられた踏み臼遺構の臼の底に敷かれていた石材や明治期の水簸槽に使われていた板材、ロクロを設置したクルマツボの床材に転用されていた登り窯の窯道具である粘土製の火避けなど、遺物として持ち帰ることのできた実物も展示しています。



触れる展示（踏み臼の底石）



クルマツボの構築部材

有田焼参考館の展示

有田焼参考館は、歴史民俗資料館東館と渡り廊下で繋がり、一見、別の独立した施設だとは気付かない方も多いと思います。しかし、発掘調査で出土した陶片を専門に展示するため設立された全国的にも稀有な施設で、常設展でも、多くの陶片類で有田焼の歴史を振り返ることができるようになっています。

今回の企画展でも、有田焼参考館では、泉山一丁目遺跡・中樽一丁目遺跡で出土した500点以上の陶磁片を展示し、見応えのある内容になっています。17世紀前半から明治以降に至る時期ごとの変遷では、かつて、佐賀藩の産物的磁器生産の中核地として機能した“内山”の製品の質と幅を、時期ごとに知ることができます。また、「生活のやきもの」として工房での生活で使用された陶磁器類や、「特別な磁器」として鍋島焼や禁裏御用品など、いくつかのテーマ別に集めた展示コーナーも設けました。そのほか、「出土陶磁の名品展」のコーナーでは、出土した陶磁器類の中から、壊れずに現代まで伝世していれば、美術品として鑑賞に堪えるであろうものを集めてみました。意外にも伝世品と出土品では同一のものは少なく、これまでの有田のあゆみの中で、どれほど多くの形や文様などが考案されてきたのか、あらためて驚かされます。伝世品とはひと味違う、名品の数々をご鑑賞いただければと思います。

おわりに

有田町教育委員会では、有田町歴史民俗資料館東館を中心として、例年、企画展を開催しています。ほかにも、今回も利用した有田焼参考館をはじめ、歴史民俗資料館西館や有田陶磁美術館、旧田代家西洋館などの展示施設も所管しており、今後もテーマに則して、各展示施設で企画展を開催していく予定です。今回の企画展も、発掘調査時の現地説明会では多くの方々にご参集いただいたように、注目を集めた発掘調査の成果展ですので、ぜひ一度足を運んでみてはいかがでしょうか。（伊達惇一郎）



有田焼参考館の展示風景



17世紀前半



18世紀前半



鍋島焼



ダニエル電池のケース

【展示出土品の一部】

企画展図録販売中!!

企画展「足もとに眠る 有田焼工房を探る！」～泉山一丁目遺跡・中樽一丁目遺跡発掘調査報告展～の図録が好評発売中です。今回の企画展の概要をまとめた内容になっておりますので、まだお求めでない方は、有田町歴史民俗資料館までお問い合わせください。



【販売場所】 有田町歴史民俗資料館東館
【販売価格】 1冊 500円
【ページ数】 20ページ



旧田代家西洋館で記念の 写真を撮影しませんか



「西洋館を彩る花×器」展

旧田代家西洋館は、貴重な擬洋風建築の現存例で、近代初頭の有田の商取引の様相を表す価値の高さから、平成30年12月に国の重要文化財に指定されています。現在は、土・日・祝日と春の有田陶器市、秋の有田陶磁器まつり期間の、午前10時から午後4時に開館（無料）しており、観光等に訪れた多くの方々にご覧いただいています。

それ以外の日は休館日となっていますが、特別な催し物や一般の方々への貸出も行っており、先般の秋の有田陶磁器まつり（11 / 19～23）期間中の休日（21

旧田代家西洋館は、貴重な擬洋風建築の現存例で、近代初頭の有田の商取引の様相を表す価値の高さから、平成30年12月に国の重要文化財に指定されています。

～23）には、有田華道連盟と有田陶芸協会の饗宴による「西洋館を彩る 花×器」展が開催されました。著名な陶芸作家の方々とさまざまな華道流派の会員のコラボは、有田ならではの豪華な取り合わせで、明治の雰囲気息づく西洋館のたたずまいとそれを彩る鮮やかな生け花の数々に、多くの方々を楽しまれています。



婚礼写真の撮影風景

また、ほかにも貸館の制度を活用して、先日は、県内在住の新婚のご夫婦に婚礼写真の撮影にご利用いただき、思い出に残る重要文化財での撮影をご堪能いただきました。館の使用は2週間前までに申請し、使用料は3時間につき1,570円です。詳しくは文化財課（TEL. 43-2899）まで。



活動報告とご案内

新型コロナウイルスの影響で、小中学校の団体見学等の受け入れが難しくなっていることから、当館では、逆に学芸員が現地に出向いて学習活動を支援する方向で、積極的に活動を行っています。一例としては、小学生の放課後学習支援活動の一つとして、「教科書になった柿右衛門」と題して講話を行いました。また、「有田を誇りに思う教育推進事業」の一環として学校教育課が主催する「伝えよう！私のルーツ」事業にも協力しています。この事業では、町内各小学校の6年生の代表児童が、自分や地域のルーツを取材し、何を感じ、今後それをどう活かすかをまとめて、公开发表するものです。令和2年12月13日(日)の10時より焱の博記念堂（有田町黒川甲1788）にて開催予定ですので、興味をお持ちの方はぜひ足を運んでみてください。

そのほか、学校関係にとどまらず、地域の学習活動などを検討・計画されている団体がありましたら、当館までお気軽にお問い合わせ（TEL. 43-2678）ください。



新しいミュージアムグッズ のご紹介

有田陶磁美術館所蔵の佐賀県重要文化財「陶彫赤絵の狛犬」が、「一筆せん」になりました。元禄年間（1688～1704）の作で、元は一对で泉山の弁財天社に奉納されていましたが、現在は口を開けた阿形だけが残り、美術館に収められています。通常、紹介写真等では見ることの少ない、ユーモラスな後ろ姿をあしらったデザインになっています。ぜひ、おみやげ品や有田のPRにいかがでしょうか。



【販売場所】
有田陶磁美術館
有田町歴史民俗資料館東館
【販売価格】
1冊 200円
左：裏表紙 右：表紙

季刊『皿山』

通巻 128号（令和2年12月1日）
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4-1
☎ 0955-43-2678 FAX0955-43-4185
URL : <http://www.town.arita.lg.jp/main/169.html>